「PBL」の授業サポートについて

大学院技術経営研究科
大野　雅嗣

1、「PBL」のスタート

社会人学生として2003年より教育人間科学部に入学してから、大学の授業に対して感じていた事が２点あった。一つは実践的な体験を通して学べる授業が極めて少ないこと。もう１点が社会に出る前に必要なトレーニングをする機会がほとんどないことである。

そこで、チーム作りから始めて、企画立案、実行、振り返り、改善（PDCA サイクル）を実践的な体験から学べる授業の提案をする。

2、初年度の授業を振り返って見えたもの

2008年度にスタートした最初の年の授業ではテーマを決めるのに多くの時間を費やし、その結果始動が大幅に遅れ、その出遅れが最後までひびいてモチベーションの低下をもたらした。

２年目の授業の前に、初年度の問題点に対処すべき準備をした。

3、有意義なテーマとは何か

学生及び地域社会にとってメリットがあることが、継続性のある事業には欠かせないポイントであると考え、学内向けと学外向けに分けて２つの大枠をあらかじめ想定しておいた。

大学内は、学内の活性化により地域の人々を呼び込むことを仮の手テーマと考えた。

学外向けは、中心街の活性化に関わることで、大学生を中心街に導くことを仮のテーマと考えた。

4、授業前に準備

前年度に企画しながら実行できなかったもの、思うような成果を得られなかったものから絞り込み、学内向けは前年度に企画したコミュニケーション・イベントを発展的させる事を想定した。

学外向けは、中心街で事前に聴き取り調査をするすることで現状把握を試みる。その結果、大学生の参加を中心街の人々から熱望される。

そこで、この内容に関心を持っている学生に事前に声をかけ、ある程度の目的を持って授業に参加してもらう。

5、重要な決定は全て学生主体で

事前準備はしたが、授業開始後は一歩引いて、チーム作り、テーマ決めには口を出さないでいて、テーマ決定後に具体的な方針、方策をアドバイスした。受講生との対応は以下の４点に集約される。

1、各チームの話し合いには必ず参加する。
2、オブザーバー的なスタンスで質問のみを受ける。
3、アドバイスはするが、決定は全てまかせる。
4、進行状況は常にチェックしておく。

6、テーマ決定後

何から手をつけ、どのように進めていったらいいのかを示す。ヒント、アドバイス、アイデアは出すが、意思決定は全てチームに委ねる。

結果として、学内の企画では実際の運営にも参加協力をして。学外の企画では新聞社からの取材や各方面からのアプローチに対する窓口となる。

企画後の振り返り、発表準備にも参加して、最終プレゼンに対するアドバイスをすることで、まとめとした。

「PBL」の授業サポートについて

大学院技術経営研究科2年
大野　雅嗣

平成20年度から「ＰＢＬ」の授業スタート

◈実践的な体験を通して学ぶ
◈社会に出る前のトレーニング
◈チーム作り、企画、立案、実行

初年度ふりかえりで見えたもの

◈テーマ決めに大きな壁が有る

初年度の授業ではテーマを決めるのに多くの時間を費やした。
その結果始動が大幅に遅れ、その出遅れが最後までひびく。
モチベーションの低下をもたらす。

有意義なテーマとは何か

学生と社会人の双方にとってメリットがあることが。
長期的な継続事業にとってはずせないポイント。

学内中心と学外中心2つの大枠

◈学内活性化により地域の人々を呼び込む。

◈中心街の活性化に大学生として関わることで、大学生を中心街に導く。

学内は前年の例を発展的に
（コミュニケーション力の向上を目的に）

学外は中心街で聞きとり
（大学生の参加を熱望される）

授業前にテーマのヒント

◈関心を持っている学生に事前に声をかける。

◈ある程度の目的を持って授業に参加する学生を確保する。

授業開始後は一歩引いて

授業が始まってからはチーム作り、テーマ決めには口を出さない。
テーマが決まったところで具体的な方針、方策についてはアドバイスする。

重要な決定は全て学生主体

◈各チームの話し合いには必ず参加。
◈オブザーバー的なスタンスで質問のみ受ける。
◈アドバイスはするが決定は任せる。
◈進行状況を常にチェックしておく。

テーマ決定後にどう進めて行くか、何から手をつけてゆくか

学内・実際の運営にも参加、協力。
学外・新聞社からの取材、各方面からのアプローチには窓口に。
ヒント、アドバイス、アイデアは出すが、意思決定は全てチームに委ねる。